

## ふるさとのよさをみつめる自然体験・交流活動

### 福島県西白河郡西郷村立川谷小学校

#### 学校の概要

学校規模

学級数：6学級

児童数：77名

教職員数：12名

体験活動の観点からみた学校環境

那須甲子連峰の東麓に位置し、学区には阿武隈川の源流があり、自然環境に恵まれている。

戦後、入植者によって開拓された地域で、酪農を主体とした農業が盛んである。また、じゃがいもや椎茸など野菜や菌糸類の栽培も盛んである。

この地域には、「開拓は教育に始まり、教育に終わる。」という言葉がある。この言葉が示すように、地域の教育に対する関心は非常に高い。学校だけでなく保護者・地域で共に子どもを育てようという意識も高く、学校に対して協力的である。

学校の特色ある教育活動に対して、村から補助金がある。

連絡先

〒961-8071

福島県西白河郡西郷村大字真船字

蒲日向269

電話：0248(25)0065

FAX：0248(48)1038

ホームページ：

<http://www.vill.nishigo.fukushima.jp/~kawatani-es/>

電子メール：

[kawatani-es@vill.nishigo.fukushima.jp](mailto:kawatani-es@vill.nishigo.fukushima.jp)

#### 体験活動の概要

活動のねらい

「ふるさと川谷」を調査したり、他の学校と交流したりすることで、阿武隈川源流の里としての環境について考える。

酪農についての調査体験活動やじゃがいもを栽培する活動を通して、ふるさとの産業について考える。

開拓当時の先人の努力と工夫に気付くとともにふるさとを大切にすることを育む。

川谷について調べたことをまとめ、そのよさを外に発信できる。

主な活動内容・方法

自然に関わる体験活動

西郷瀨（阿武隈川）探検・川谷探検・阿武隈川探検

ボランティア活動など社会奉仕体験活動

デイサービスセンター訪問

勤労生産体験活動

じゃがいも栽培・牛の世話

交流体験活動

ふれあい教室・交流学习

体制等の工夫

引率など保護者のボランティア

栽培活動等の講師は地域の方々に依頼

村教育委員会からの補助金

活動の成果等

「川谷っていいところだな」、「川を汚さないようにしよう」など、環境やふるさに目を向ける子どもが増えてきた。

保護者や地域の方々の協力をたくさん得ることで、学校と家庭・地域社会との連携が更に深まり、地域の中で共に子どもを育てていこうという意識が高まった。

## 1 活動に関する学校の全体計画

### (1) 活動のねらい

生活科や総合的な学習の時間において、自然体験活動や勤労体験活動を行うことによってふるさとのよさを見つめる。

ア 阿武隈川源流の里として、阿武隈川について調査したり、河口の学校と交流したりし、ふるさとの環境について考える。

イ 川谷地区の産業である酪農について調査・体験したり、特産物であるじゃがいもを栽培する活動を通して、ふるさとの産業について考える。

ウ 地域の人々の協力を得ることで、先人の努力と工夫に気付くとともに、ふるさとを大切にすることを育む。

エ ふるさとのよさについて、気付いたことをまとめ、他に発信する。

### (2) 全体の指導計画

#### ア 活動の名称

「川谷っ子タイム」

#### イ 実施学年

全学年

#### ウ 活動内容

自然に関わる体験活動：西郷瀨探検 川谷探検 源

流・中流・河口探検・川谷再発見

ボランティア活動などの社会奉仕体験活動：デイサービスセンター訪問

勤労生産体験活動：じゃがいも栽培、牛の世話

交流体験活動：お茶の水女子大学附属小学校とのふれあい教室

阿武隈川河口に位置する宮城県亘理町立荒浜小学校との交流



#### エ 教育課程上の位置付け

1年・2年については生活科で、3年以上については総合的な学習の時間を利用して行う。また、夏季休業中には、希望者を募り、保護者の方の案内で更に源流の奥（雌滝・雄滝）まで探検する課外学習も実施した。

#### オ 実施時期（日数や時間数）

西郷瀨探検（1年）：年間を通して活動。生活科12時間

川谷たんけん（2年）：生活科33時間

川谷を調べよう（3年）：総合的な学習の時間105時間

阿武隈川探検隊（4年）：年間を通して活動。総合的な学習の時間85時間

デイサービスセンター訪問（5年）：11月～2月。総合的な学習の時間30時間

お茶の水女子大学附属小学校とのふれあい教室（5年・6年）

6月と9月に実施。6月のふれあい教室は学校行事2日。その他は、総合的な学習の時間43時間

#### カ 活動場所

学校周辺、デイサービスセンター、近所の酪農家、西郷瀨、阿武隈川源流、阿武隈川上流・中流・河口（宮城県亘理町）、お茶の水女子大学附属小学校、東京都内等

#### キ 継続の状況

年度の中間と最後に発表会を行い、他学年の意欲付けとしている。

交流活動については、お茶の水女子大学附属小学校とは8年間、荒浜小学校とは6年間交流している。

## 2 活動の実際

### (1) 自然に関わる体験活動(一部)

#### ア 西郷瀨探検(1年 生活科)

学校から歩いて10分程度のところにある「西郷瀨」(阿武隈川)で、四季折々の様子を観察したり、そこで遊んだりするなど、身近な自然に浸る活動を行っている。

子どもたちは、季節ごとに瀨への道のりで虫を見つけたり花や葉っぱを摘んだりし、瀨では、川に入って水遊びをしたり、砂山をつくったり石きりをしたりし、体全体でそれぞれの自然を感じとり、また友達と仲良く活動することができた。

なお、この活動には、子どもの活動の広がりと安全性を考慮し、保護者の方々にも引率していただき、「地域の先生」としてご協力いただいた。

#### イ 阿武隈川探検隊(4年 川谷っ子タイム)

4年生は、源流の里「川谷」のよさを発見することを目的に、阿武隈川探検隊として阿武隈川についていろいろな視点から体験活動を行っている。

##### (ア) 出会い

年度当初に、子どもたちの阿武隈川に対するイメージを調査したところ、ほとんどの子どもが川に関心がなく、どこを流れている川なのかを知らなかった。そこで、学校近くの西郷瀨へ2度探検に出かけ、様々な調査活動を行った。そして、地図や様々な資料の調査や川に住む生物の調査や水質調査などの現地調査から、西郷瀨は阿武隈川であること、そして自分たちの住んでいるところが源流に位置し、たくさんの市町村を流れ宮城県で太平洋に出ること、更に西郷瀨の水は大変きれいであることを学び取ることができた。

##### (イ) 上流(源流)へ

この活動後、子どもたちから、上流・中流・下流はどのようになっているのかという疑問が出された。そこで次に、上流(剣桂付近)への探検に出かけ、西郷瀨と同じような調査活動を行った。子どもたちは、西郷瀨との川の流れの様子(川幅・流速・水質・石など)の違いに気付くとともに、より水が澄んできれいであることを実感した。しかし、この奥に旅館があるためにこの水は飲めないことを知ることとなり、阿武隈川への興味・関心を一層高め、(一部の子ども)夏休みの雄滝・雌滝への沢登りの活動につながった。

##### (ウ) 河口へ

2学期に入り、今度は河口へ行きたいという声があがってきた。そこで、河口観察への計画を立てた。これまでの3度の探検の経験を生かし、子どもたちは「生き物」、「水質」、「流れの速さ」、「海との境界」の4つの課題をスムーズに設定することができた。

そして、河口へ出かけた。生まれて初めて見る河口は、自分たちが想像していた様子と全く違い、驚きの連続であった。風の強さ、砂浜の歩きにくさ、水の濁り具合、たくさんのゴミに大変驚いていた。その後、自分たちの課題を解決するために班ごとに調査活動を行った。河口を目の当たりにしたことで源流と河口との違いを肌で感じることもできたようだ。(帰りには、交流を続けている荒浜小学校に立ち寄り、お互いの阿武隈川学習について紹介し合った。)

なお、この活動に関わる経費については、村の特色ある教育予算から貸切バス代等を支出し、できる限り家庭の負担を軽減した。また、多くの保護者に引率の協力をいただくことで、安全面へも十分な配慮を行った。

以上の西郷瀨・上流・源流部（一部の子ども）・河口への探検をまとめ、学習発表会で国語科の「ニュースの時間です」の単元とタイアップし、ニュース形式で発表会を実施し、他学年の子どもたちや保護者の方々に報告し、大変好評であった。

## （２）ボランティア活動などの社会奉仕体験活動

### ア デイサービスセンター訪問（５年 川谷っ子タイム）

人とのふれあいをテーマにしている５年生は、東京の友達とのふれあい教室（後述）の他に、地域に住むお年寄りとの交流を行っている。車で５分ほどのところにある村のデイサービスセンターを、平成１３年度は３回訪問した。ここに通うお年寄りの中には、目や耳・足が不自由な方々もおられ、交流活動を行うことで子どもたちは、人とのふれあいの温かさだけでなく、福祉にも目を向けるようになった。

## （３）勤労生産体験活動

### ア じゃがいもの栽培（全学年 生活科・川谷っ子タイム）

川谷の特産物であるじゃがいもを全校生で栽培している。

４月に、開拓当時からこの地域に住む農家のお年寄りを講師として迎え、種芋を植えた。この方には、種芋の植え方の指導とともに、開拓当時の地区の様子や人々の暮らし、開拓の苦労話などを一緒に話していただき、各学年の総合的な学習の時間のきっかけにもなっている。

芋を植えた後は、各学年の計画で除草等を行い、８月の収穫を迎えた。収穫したじゃがいもは、自分たちの学級で料理をして食べたり、交流の学校へのプレゼントにしたり、いろいろと活用している。また、残りのじゃがいもは関係者に販売し、活動の資金に当てている。

### イ 川谷を調べよう（３年 川谷っ子タイム）

川谷探検を実施し、川谷地区の酪農や特産物について目を向けさせ、その後自分たちで、「牛」、「じゃがいも」、「しいたけ」、「トウモロコシ」等について各自課題を設定し、課題解決に向け、農家を見学したり、実際に世話をする体験をしたり、栽培したりした。そして、学習のまとめでは、じゃがいもや椎茸、牛乳を利用して、お世話になった方々を招待して特産物パーティーを開いた。

### ウ 川谷たんけん（２年 生活科）

２年生では、地域の自然や施設、地域の人々との関わりを深めることを目指し、友達と協力して川谷地区全体の探検を行っている。具体的には、景観に恵まれた阿武隈川の学校より上流や地域の主な産業である牧畜の牧場を訪ねたり、デイサービスセンターや特産物を販売する商店を見学したりしている。これらの活動には、３年生以降の総合的な学習の時間の学習内容への橋渡しという意味合いも持たせている。

## （４）交流体験活動

### ア 宮城県亘理郡亘理町立荒浜小学校との交流

阿武隈川の最も下流に位置する宮城県亘理郡亘理町立荒浜小学校とは、平成６年度に荒浜小のＰＴＡの方々が上流見学にきたことがきっかけで交流が始まり、平成１１年のロータリークラブ主催那須甲子の森創造交流事業「２１世紀の森づくり」に両学校が招待されて、本

格的に学校同士の交流が始まった。

今年度は、下のような交流を行った。

「21世紀夢の森づくり」での交流（荒浜小5年生が川谷小訪問）

源流ハイキングでの交流（荒浜小の先生方が来校し、雄滝・雌滝へ）

P T A 5年行事での交流（P T A 学年行事で荒浜小を訪問）

4年川谷っ子タイムでの交流（河口見学時に荒浜小を訪問）

イ お茶の水女子大学附属小学校との交流（5～6年 川谷っ子タイム）

お茶の水女子大学附属小学校（帰国児童学級4年～6年）との交流は、平成6年度に始まり、現在では年2回の交流活動を実施している。この交流を本校では「ふれあい教室」と称し、地域間の交流を通して、自分たちのふるさを見つめ、よさを発見するとともに他に発信する力を培うことを目的に、6月には東京で、9月には川谷で実施している。

（ア）第1回ふれあい教室（東京）

6月のふれあい教室は、東京での活動である。東京での活動については、附属小学校の子どもたちが川谷の友達に「自分たちが住んでいた外国の様子を紹介する」、「東京の町を紹介する」、「仲良く活動する」という目的で、グループごとに話し合い活動を計画してくれた。そして、それぞれのグループに川谷の子どもたちが分かれて入り、楽しく活動させていただいた。今年度の計画は次のようなものであった。

校外コース A 原宿・渋谷見学コース

同 B 文京・豊島見学コース

同 C 浅草見学コース

同 D 早大・東大コース

校内コース 外国のゲームで遊ぼう

お茶会（お茶菓子アラカルト）

会話レッスン（仏、独、中、英）、方言紹介



今年の交流では、各学年で話し合い、川谷らしいお土産として、「クワガタ・カブトムシの幼虫」、「腐葉土」、「蔓のリース」、「水源地の水」を自分たちで準備し持参した。

（イ）第2回ふれあい教室（川谷）

9月に、福島県裏磐梯でお茶の水女子大附属小学校の6年生が林間学校を実施する。その際の選択プログラムで帰国児童学級の6年生45名が本校を訪れ、第2回ふれあい教室を実施した。

第2回目は、本校の子どもたちが、東京の友達に「ふるさと川谷のよさを伝えよう」という目的で、7月から準備にとりかかった。それまで川谷っ子タイムで学習したことをもとに、グループごとに話し合い、川谷のよさを伝えるための計画を立てた。13年度は、以下のような活動計画であった。

椎茸・じゃがいもお料理コース（収穫からすべて自分たちで）

じゃがいも料理（収穫から）+雪割橋（阿武隈川にかかる橋で景勝地）散策コース

おいしい水を探そうコース（水源地へのハイキング）

牛見学（乳搾り体験）+西郷瀨で遊ぼうコース（船作りなど）

のんびり西郷瀨コース（つり・虫取りなど）

山遊びコース（山で遊び、蔓を使って工作）

### 阿武隈川上流散策コース（水遊び）

以上のように、ふれあい教室では、自分たちのふるさと（東京・川谷）のよさを伝えるために、ふるさとを十分に知らなくてはならず、両校の子どもたちにとって、ふるさとを見直すよいきっかけとなっている。また、ふれあい教室の準備には、両校ともに多くの保護者の協力を得ており、大人と子どものふれあい・コミュニケーションも高まった。

## 3 体験活動のための体制

### （1）学校・家庭・地域との連携

特に、体験活動では、子どもの活動の保証，安全確保の上で、より多くの保護者や地域の方々の協力を必要とする。幸い、本校の保護者・地域の方々は非常に協力的で、「学年だより」、「学校だより」等で依頼すると、たくさんの方々が協力を申し出てくださる。これも、日頃から本校教育についての情報を保護者や地域に常に発信していることと協力的な地域性のたまものと感じる。

### （2）教育委員会・村・関係機関との連携

これまで述べてきた活動については、非常に多くの費用がかかっていることは事実である。もし、これらすべてを保護者が支払うとなると、相当な負担になることは間違いない。本村においては、各学校に「特色ある教育予算」が配分されており、今回述べた活動のほとんどをこの予算から支出し、子どもたちの体験活動に役立てている。

## 4 成果と課題

### （1）成果

- ・ 「ふるさと川谷」という素材を通して、各種の体験活動を総合的・段階的に組み合わせることで、よりねらいにせまることができた。
- ・ 「川谷っていいところなんだ」、「阿武隈川を汚さないようにしよう」など、環境やふるさとに目を向ける子どもたちが増えてきた。
- ・ 特産物であるじゃがいもを栽培したことで、勤労の尊さや生産の喜びを味わうだけでなく、その後の総合的な学習の時間への関連が図られ、主体的な学習活動が展開できた。
- ・ 保護者や地域の方々の協力をたくさん得ることで、学校と家庭・地域社会との連携が更に深まり、地域の中で共に子どもを育てていこうという意識が高まった。

### （2）課題

- ・ 体験活動を継続するための経費をどのように確保していくかが課題である。
- ・ 他校との交流については、年間を通じた交流が図られるように計画を改善する必要がある。

## 5 今後の取組

### 次年度の向けての改善の方向

全体構想を更に吟味し、各種の体験活動を総合的・段階的に組み合わせ、ふるさとの環境を見つめ、そのよさを外に向かって発信できる子どもたちを育てていきたい。

【本事例活用に当たっての留意点】

本校は、戦後入植者によって開拓された地域であり、酪農やじゃがいも、椎茸などの野菜や菌糸類の栽培が盛んである。このような地域の特性や自然状況を最大限生かした自然体験活動を展開しているのが本校の特徴である。具体的には、阿武隈川源流という地域性を生かした阿武隈川源流の探検、水質調査、水棲動物調査など、あるいは勤労生産体験活動などが行われている。また、阿武隈川下流の小学校との交流、東京都内の小学校との交流なども行われている。前者は、阿武隈川という身近な川を通して源流と下流とを比較して考える、後者は西郷村という地域性を東京都という都会と比較して考えるというように、明確な視点の設定が行われている。

自然体験や交流体験を充実するには、地域等の特性を最大限に生かすとともに、学習者の問題意識を十分高め、かつ指導の視点を明確にするなど工夫してこそ「自ら学び自ら考える」子どもの育成につながる。